

令和2年度 かいじあむ古文書講座 第8回

おうちで古文書講座

歴史のなかの年賀状

令和3年1月23日（土）

山梨県立博物館 小畑茂雄

はじめに

みなさんこんにちは。
学芸員の小畑です。



講師近影
シンボル展「強請祈願とやまなしの雨乞い」を開催中です。

令和3年最初の今回も、
「**おうちで古文書講座**」
として、「くずし字」の
世界をみなさんと楽しん
でいきたいと思えます。
おつきあいくださいます
ようお願いいたします。

今回は年賀状を読む

タイトル画面の緑のなかにた
たずむ記念碑のようなもの。
これは富士身延鉄道（現在の
JR身延線）の建設に功労の
あった人々の顕彰碑です。小
野金六・耕一親子、根津嘉一
郎、堀内良平、河西豊太郎、
小泉日慈と、主に「甲州財
閥」と呼ばれる人々です。
今回のテーマは1月らしく、
彼ら「甲州財閥」の人々（小
泉は身延山法主ですが）が記
した「**年始の書簡**」について
読んでまいります。

まずは「甲州財閥」について

簡単に「甲州財閥」について触れますと、明治から戦前にかけて、鉄道や電力事業に投資して、東京や全国有数の存在となった投資家・実業家といった人々です。主に東京馬車鉄道や東京電燈を手中とした若尾逸平、甲武鉄道（現在の中央線）や全国軽便鉄道チエーソンである大日本軌道を経営した雨宮敬次郎が代表格といえます。

まずは「甲州財閥」について

小野金六 韮崎市出身。富士製紙や富士身延鉄道などを経営し、富士北麓開発に先鞭を付けた若尾や雨宮とともに挙げられる実力者。

根津嘉一郎 山梨市出身。東武鉄道の経営で知られる「鉄道王」。根津美術館につながる美術品収集や茶人としても著名な文化人。

小林一三 韮崎市出身。阪急・宝塚グループを実質的に創業した人物。大衆文化時代を築き、根津同様美術品収集や茶人としても著名。

堀内良平 笛吹市出身。東京のバス事業や富士北麓開発に先鞭を付けた人物。

河西豊太郎 南アルプス市出身。山梨交通などの交通事業に携わり、根津美術館設立にも尽力。

早川徳次 笛吹市出身。日本で最初の地下鉄を実現させた「地下鉄の父」。

彼ら人物らの交流を示す写真が次の頁のものです。

そのほか左のような人物たち
がおります。常設展示内
「巨富を動かす」でも紹介
している人物もおります。



根津

早川

河西

書後

若尾家三代目謹之助宛

此の國産杉材

材はよくあり

浮山より運ば

来の程よくあり

ふりかたよく

種よくあり

よくあり

若尾家三代目

小野金六

若尾謹之助様

・小野金六書簡

（若尾謹之助宛）

では、こちらの資料を
読んでいきましょう。

こちらは小野金六から
若尾家三代目の謹之助
にあてた書簡です。

お手元に紙やノート、
あるいはパソコンなど
のソフトをご用意して
いただき、次のページ
の虫食いだらけの解読
文を穴埋めしてくださ
い。

敬復

隆昌

柿

澤山

成

不

候

候

大正八年一月五日

小野金六

若尾謹之助様

敬復

敬復

隆昌

候、

ハ

柿

として

澤山二

仕候、

厚

候

拝

大正八年一月五日

小野金六

若尾謹之助様

【次ページは講師の正答案です。】

敬復

愈御隆昌奉南山候

陳八御國産枯露

柿御年甫として

澤山二御恵贈被

成下難有拝受仕候

不取敢御芳志御厚

禮迄申上度如此

御坐候 拜具

大正八年一月五日

小野金六

若尾謹之助様

敬復

愈御隆昌奉南山候、

陳八御国産枯露

柿御年甫として

澤山二御恵贈被

成下難有拝受仕候、

不取敢御芳志御厚

禮迄申上度如此

御坐候 拜具

大正八年一月五日

小野金六

若尾謹之助様

敬復

敬復 陸奥 山

陸奥 山

林 山

澤山 山

成山 山

山 山

山 山

山 山

山 山

十 山

若尾 謹之助 様

では、少しずつ読んでいき
ましよう。

1行目の「敬復」ですが、
返信の冒頭に書かれる頭語
ですね。

「敬」と「復」のくずしも
みてみましょう。

敬 敬 敬 敬 敬
敬 敬 敬 敬 敬
敬 敬 敬 敬 敬

復 復 復 復 復
復 復 復 復 復
復 復 復 復 復

書後

②

愈御隆昌奉南山候

陣山國産松露

柿 口味有りと

浮山より産物被

成の程より毎々有

ふり給ふ方志是

後年中より有候

心算を 有

大正二年一月

小野金六

若尾謹之助様

2行目は

愈御隆昌奉南山候

となります。

読み方は

「いよいよごりゅうしよ

う、なんざんたてまつり

そうろう」

となります。

「愈」は「いよいよ」で

「々」が書かれる場合も

ありますが、ここでは書

かれていないようにみえ

ますね。くずしをみてみ

ると、上部の「愈」のつ

くりは原形を留めています

が、「心(したごこ

ろ)」についてはほぼ横

一文字にくずされています

ね。

書後

2

愈御隆昌奉南山候

陣山國産松露

柿口山有とて

浮山とて有とて

成の程とて有とて

ふ山松とて有とて

後山松とて有とて

山松とて有とて

山松とて有とて

山松とて有とて

山松とて有とて

愈御隆昌奉南山候

「愈」のくずし方も確認してみましよう。

愈愈愈愈愈
愈愈愈愈愈
愈愈

「隆昌」はあまりくずれていませんね。

「奉」は返読文字でこのように「三」と「人」の部分が簡略化されていることが分かります。頻出する字なので、覚えていきましょう。

奉奉奉奉奉
奉奉奉奉奉
奉奉

書後

2

愈御隆昌奉南山

際、以國産松露

柿、以手有とて

浮山之、以手有とて

成之、以手有とて

ふ、以手有とて

後、以手有とて

、以手有とて

大正二年一月五日

小野金六

若尾謹之助様

愈御隆昌奉南山候

「南山」の「南」は比較的わかりやすいくずしなのですが、「南山」という語彙が一般的でないので、判読に躊躇してしまふところでは。

南南南南南
南南南南南
南南南南南

書後

②

愈御隆昌奉南山

際、山國産物

林、山、南、山

澤山、山、南、山

成、山、南、山

ふ、山、南、山

後、山、南、山

山、南、山

山、南、山

十聖金六

若尾謹之助様

愈御隆昌奉南山候

そこで「南山」を辞書で引いてみますと・・・

①南方にある山。世俗を離れたすまいから望む山。

②（「南山の寿」から）人の長寿を祝うこと。

③的をかけるために弓場の正面に設ける山形の盛り土。あずち。

そのほか、吉野山、高野山のことを指すとのこと。

「南山の寿」は、長寿Ⅱいつまでも丈夫であることから、事業などが永く続くことも含め、それを祝う言葉とされています。

解読を進めるうえでは、読む側の語彙力は大事ですし、知らない語彙に出会うと、辞書などで調べることがとても大事だと教えられます。

書後

2

愈御隆昌奉南山候

陣、山國産物、

神、口、

澤山、

成、

ふ、

禊、

、

大、

十、

若、

愈御隆昌奉南山候

「候」については、ただの点「、」のようになる場合もありますし、必ず使われる字だけに省略も進みますし、省略のされ方もバリエーションがあります。

候候候候候
作作作作作
凡凡凡凡凡
山山山山山
心心心心心

東後

陳八御国産枯露

陳八御国産枯露

神

澤山

成

ふ

後

な

大

十

若

3行目は、

陳八御国産枯露

となります。

読み方は、

「のぶればおんこくさん
ころ（がき・・・）」
となります。

「陳」は「陳述」などと
いうように「申し上げ
る」という意味があり、
くずしもござとへんに
「東」でわかりやすい字
です。「東」は中国語の
簡体字の「东」のように
くずします。「東」と
「車」は似ており、
「車」だと「陣」になっ
てしまいますので、ご注
意ください。

市役

陳ハ陸奥ヨリ山ヲ

③ 陳ハ國産枯露

柿ヨリ有クテ

浮山ノヨリ有クテ

成ノ程ヨリ有クテ

ふらたの芳志屋

後年市ノ芳志屋

市ノ

おる

大正二年一月

十聖金六

若尾謹之助様

陳ハ御国産枯露

「国産」もほとんどくずれておらず、「国」は旧字の「國」と書かれていますね。「産」はほとんどくずれていません。

「枯露柿」の「枯」もほとんどくずれておらず、「露」も語彙力で読めてしまえますね。「露」は「雨」かんむりのなかの点々が省略されているようにすや、「足」へん、つくりの「各」など、パーツのくずし方の見本になりますので、よく観察して覚えてください。

東儀

皇太后陛下

陛下

柿御年甫と

澤山と

年

ふ

御

年

甫

大正

十

若尾謹之助様

4行目は、

柿御年甫として

となります。

読み方は、

「（ころ）がき、おねん
ぼとして」

となります。

「柿」はほぼそのまま、

「御」は前の行にもある
ので特定しやすいですね。

「年」は「手」にくずし
が似ていますが（『くず
し字用例辞典』には「全
く同形となるので読み誤
りやすい」とあります）、

新年のあいさつなので、

「手」よりも「年」が入
りそうですね。ただ

「年」の次は少し迷いま
す。

西後

皇太后陛下

臣等謹言

柿御年甫と

澤山の

成の

ふ

後

柿

大正

十

若尾謹之助様

柿御年甫として

「手」に似てる（くずしが同じ）「年」のくずしもみておきましょう。

季雪年年年

年年年年年

年年年年年

年年年年年

東儀

皇太后陛下

陛下

柿御年甫と

浮山

年

年

年

年

年

十

若尾謹之助様

柿御年甫として

そして、「年」の次の字ですが、2行目の「南」にも似ている字ですが、点もついていることから、みたまま判断すると「甫」という字が浮かんできます。

とはいえ「年甫」という語彙は一般的ではないので、辞書を開いて見ることにしますと、

【ねん-ぽ】

①年のはじめ、年始、正月

とその意味が出てまいります。ここでは「年始」や「年賀」と同様の意味で使われていることが分かりますね。

東後

高上陸島多高山

陸上國産柿露

柿^④年甫とて

浮山とて高野被

成の程とて高野被

ふ高野被高野被

柿年甫とて高野被

高野被

高野被

十聖金六

若尾謹之助様

柿御年甫として

かなの「として」は良い
でしょうか。

「て」が震えているよう
に書かれているのは、
「て」の原型となってい
るのは「天」の変体仮名
ですので、この震えに
「天」の名残りをみるこ
とができます。かなを読
むうえでは、もとの漢字
を意識すると読めるケ―
スが増えますので、ぜひ
意識していただきた
いところです。

てててててて
てててててて
てててててて

取復

澤山二御惠贈被

澤山二國産物

神

澤山二御惠贈被

成

ふ

後

な

大

十

若

5行目は、

澤山二御惠贈被

となります。

読み方は、

「たくさんにごけいぞう
(なしくだ)され」

となります。

「たくさん」の「沢」は旧字の「澤」だと気が付けば、それほど難しくいわずされ方にはなっていないせんね。「二」はカタカナだとはわかりませんが、場合によってはくりかえし記号である「おどり字」(々、々、々、)である場合もありますので、文脈や位置(かなは小さく、右寄りに書く場合もある)に注意しましょう。

東後

皇太后陛下

陸奥国産物

神

5 澤山二御惠贈被

成

ふ

後

々

大正

十

若尾謹之助様

澤山二御惠贈被

「惠贈」の「惠」は、個人的には「贈」が先に分かるから読める側面があります。今回の「贈」はほとんどくずれていないので読みやすいですが、「貝」へんのくずし方として、「口」のなかの横棒二画は省略、「曾」の「田」の部分のなかの「十」の部分も省略されており、「田」とか「目」というパーツは、「口」のなかの画数を省略することに注目してください。

東儀

皇太后陸奥守山

陸奥守山

神

⑤ 澤山二御惠贈被

成

ふ

後

な

大

十

若

澤山二御惠贈被

「贈」が特定できると、二文字目に「贈」がくる単語はなんだろうと考え、かたちが近そうなのが「恵」、というような特定の仕方をします。

「恵」のくずし方を出しておきますが、2行目の「愈」と同様に、「心(したごころ)」が一画に省略されていることがわかります。

惠惠惠惠惠
惠惠惠惠惠
惠惠惠惠惠

東儀

皇太后陸奥守山守

陸奥國産物

神皇正統記

⁵ 澤山二御惠贈被

成之難と云ふ

ふに於て是方志

神皇正統記

皇

御

大正二年一月

十聖金六

若尾謹之助様

澤山二御惠贈被

「被」は返読文字です。くずし方は今回のようにすべての画数が残っているようなケースは珍しく、概ね左の用例の左端の行のような進んだくずし方を取る例がほとんどです。

被被被被被被
被被被被被被
被被被被被被
被被被被被被

成下

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

6行目は、

成下難有拜受仕候

となります。

読み方は、

「なしくだ（され）あり
がたくはいじゅつかまつ
りそうろう」

となります。

行頭の「成」ですが、見た感じでも、「来」に似ており、両者は大変似たくずし方になるので注意が必要で

成成成

成成成

成成成

来来来

来来来

来来来

来来

成下

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

「下」は「⋮」のようになりまます。記号のようなものとして覚えましょう。

※「⋮」は左に90度回転した状態が正しい向きです。

「難有」で「ありがたく」と「難」は後から読む返読文字です。「難」はおぼろげに画の原形があります。 「有」は「月」の横棒2画が省略されています。「月」のこのような省略したくずしは頻出しますので、覚えておきたいパーツです。

有有有有有

有有有有有

有有有有有

有有有有

成下

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

「拜受」の「拜」は頭語を含めて頻出します。左に例を挙げますので、さまざまな用例やくずし方を確認してください。

「拜」のつく頭語・結語

【拝啓】

拝啓 承蒙 拜啓

拝而 承蒙 拜啓

お礼 承蒙 拜啓

お成 承蒙 拜啓

【拝呈】

お呈 承蒙 拜呈

拝呈

【拝復】

承蒙 承蒙 拜復

【拝具】

相具 承蒙 拜具

成下

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

⑥ 成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

成下難有拜受仕候

「拜受」の「受」はよくみれば2〜4画目の「ツ」のようなパーツは省略されているもの。「ノ」「ワ」「又」はしっかり書かれています。「仕」もよく出る字ですが、画数も少ないので、にんべんと「土」のかたちだけでなく、文章の後で確定する場合も多い字だといえます。

取敢

不取敢御芳志御厚

不取敢御芳志御厚

不取敢御芳志御厚

不取敢御芳志御厚

不取敢御芳志御厚

不取敢御芳志御厚

不取敢御芳志御厚

不取敢御芳志御厚

不取敢御芳志御厚

不取敢御芳志御厚

不取敢御芳志御厚

7行目は、

不取敢御芳志御厚

となります。

読み方は、

「とりあえずごほうしご
こう（れい）」

となります。

行頭の「不」は否定の返
読文字で、「とりあえ
ず」と返ります。「取」

は墨で潰れていますが、

「取」特有のくずれ方に

はならず楷書に近いかた
ちです。「敢」も楷書に

近いですが、「耳」の

パーツは箱のなかの横棒

2画は省略されています。

「取」か「敢」のどちら

かが読めて、「不」が上

に付く場合は「とりあえ

ず」をとりあえず疑うと

いったところでしょうか。

取敢

不取敢御芳志御厚

御厚

御厚

御厚

御厚

御厚

御厚

御厚

御厚

御厚

御厚

不取敢御芳志御厚

「御芳志」はほぼ楷書で書かれていますね。

行末の「御厚」も良いと思います。

続く8行目は

禮迄申上度如此

となります。

読み方は、

「（ごこう）れいまでもうしあげたくかくのごとく」

となります。

行頭の「禮」は「礼」の旧字です。「厚」くとといったらお「礼」かなと考えますが、「禮」は画数が多いので迷ってしまいがちですね。

申度

家上陸島多山

陸島國産物

神子有と

澤山と

成の程と

ふりた芳志

8 禮迄申上度如此

おま

大正二年一月

十聖金六

若尾謹之助様

禮迄申上度如此

「禮（礼）」のくずしは左のとおりです。

「迄」はしんにようがほぼ「し」みために書かれていたことを覚えていた
だきたいと思えます。

「申上」は「申」はほぼ「中」になることのほぼは迷う要素はすくないかと思えます。

「度」は「廿」のパーツはだいたい省略されると覚えてください。

礼禮禮禮禮
禮禮禮禮禮
禮禮禮禮禮
禮禮禮禮禮

御復

大正八年一月五日

御座候

御座候

御座候

御座候

御座候

御座候

御座候

大正八年一月五日

小野金六

若尾謹之助様

9行目以降は、

御坐候 拜具

大正八年一月五日

小野金六

若尾謹之助様

となります。

読み方は、

「ござそうろう はいぐ

(年・署名・宛名)」

となります。

「御坐」の「坐」はまだ

れがついて「座」の場合

もありますが、ほぼ

「人」「人」「土」と書

かれていますね。「候」

は2行目と同じかたちで

すね。「拜具」は前に紹

介した用例をご確認ください。

さい。

御復

大正八年一月五日

陸奥省

小野金六

若尾謹之助様

御座候

拝具

大正八年一月五日

小野金六

若尾謹之助様

大正八年一月五日

小野金六

若尾謹之助様

御坐候

拝具

大正八年一月五日

小野金六

若尾謹之助様

日付や署名、宛名はほぼ楷書で書かれています。小野の「野」については、下に「土」が付く「墅」のかたちで書かれていますのでご注意ください。くずしにおいては「野」も「墅」もおなじかたちをとり、くずし方の区別はされていません。

書後

近世の書簡は近世の公文

書と違って個人の書き癖

が強く、くずし方や使用

する語彙や言い回しも独

特です。特定の個人の手

によるものは、いくつか

同じ手のものを読んでい

くことによつて判別が進

むので、1点だけ読んで

も判別できないことも

多々あります。

その一方で、「小野の書簡」といっても、大企業の社長さんや有力者がすべての手紙を自筆で書いているはずもなく、次ページに別の「小野の書簡」を挙げますが、解説への道のりは険しく遠いものなのです。

若尾謹之助様

小野金六

大正二年一月

西復

高上陸島多馬山

陸上國産松露

林口口有と

澤山之山多松被

成之難と多松有

ふ山松と多松有

後山と多松有

山と多松有

大山と多松有

十聖金六

若尾謹之助様

相成

向山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

山と多松有

「挿」の書き方も明らかに違いますね。

解説文は次のページです。

拜啓

向暑之節愈々御清

勝奉賀上候

扨而当富士身延鉄

道株式会社創立二際

しては不一方御高配相

受け御蔭を以而無事

成立致し候段難有御

礼申上候、就ては別封銀

洋盃組創立紀念

として献呈致候間何卒

御笑留被成下度此段

得貴意候 早々拝具

明治四十五年六月十九日

富士身延鉄道会社社長

小野金六

鷹岡村役場

小野金六

拜啓

向暑之節愈々御清

勝奉賀上候

扨而当富士身延鉄

道株式会社創立二際

しては不一方御高配相

受け御蔭を以而無事

成立致し候段難有御

礼申上候、就ては別封銀

洋盃組創立紀念

として献呈致候間何卒

御笑留被成下度此段

得貴意候 早々拝具

明治四十五年六月十九日

富士身延鉄道会社社長

小野金六

鷹岡村役場

御中

お

若尾民造宛

手紙の上、附

は、美事

枯露柿柿

書

難

也

少

礼

と

了

根津嘉一

若尾民造宛

以

・根津嘉一郎書簡

(若尾民造宛)

ではもうひとつ、根津
嘉一郎の書簡を読んで
みましょう。

お手元に紙やノート、
あるいはパソコンなど
のソフトをご用意して
いただき、次のページ
の虫食いだらけの解読
文を穴埋めしてくださ
い。

お

若尾民造宛

手紙の上、附

は、美事

枯露柿柿

の、美事

難を、思

り

少、放

礼、送

り

了

根津嘉一

若尾民造宛

以、執

・根津嘉一郎書簡

(若尾民造宛)

ではもうひとつ、根津
嘉一郎の書簡を読んで
みましょう。

お手元に紙やノート、
あるいはパソコンなど
のソフトをご用意して
いただき、次のページ
の虫食いだらけの解読
文を穴埋めしてくださ
い。

書

若尾民造様

奉賀上候、

御執事御中

一月五日

根津嘉一郎

草々

候

御

候

御

候

御

若尾民造様

御執事御中

奉賀上候、

八之

二

御二

候

御

候

草々

一月五日 根津嘉一郎

若尾民造様

御執事御中

【次ページは講師の正答案です。】

草々

益御清適之段

奉賀上候、陳者

此度ハ美事之

枯露柿澤山二

御惠送被下誠二

難有厚く御礼

申上候

不取敢一筆御

礼迄申上候

草々

草々

根津嘉一郎

一月五日 根津嘉一郎

若尾民造様

若尾民造様

御執事御中

御執事御中

お啓

是より甚きこと無

き事なると、陰

いふは、美事と

枯雪路拂作し

く雪の道しとて、

難と、思ふは、

早

少以故一茶心

礼也早

之

下

根

若尾氏出候

以執事

では少しづつ見ていきま
しょう。

文頭1行目は「拝啓」です
ね。「拝」がつく頭語は複
数ありますが、字の書き終
わり方が「口」のように見
えるのが「啓」と判別する
ポイントです。

「拝」のつく頭語・結語

【拝啓】

拝啓 承蒙 拝啓

拝而 承蒙 拝啓

お法 承蒙 友

お成 承蒙 友

【拝呈】

お呈 承蒙 呈

拝呈

【拝復】

お復 承蒙 復

【拝具】

お具 承蒙 具

②
③

益御清適之段
奉賀上候、陳者

いふは、美事と

枯雪路柿柿の

ふきの葉しとて

難と、思ふ花

早

ふり放一茶心

礼止早

ふ

了

根

若尾氏出候

以執中

2〜3行目は

益御清適之段

奉賀上候、陳者

となります。

読み方は、

「ますますごせいてきのだ
ん、がじょうたてまつりそ
うろう、のぶれば」

となります。

先ほどの小野書簡は「愈

(いよいよ)「から始まり
ましたが、相手の健勝や発
展を喜ぶ書き出しの場合は、

「愈(々)」「か」益(々

ますます)「を文頭に置く
場合が多く、まずはこのど
ちらか、という視点で判読
します。

②
③

益御清適之段
奉賀上候、陳者

以後、美事に

枯雪路拂作し

多事の運びを

難く思ふ氣

に

少放一茶心

礼也

之

了

根

若尾氏出候

以執事

益御清適之段

奉賀上候、陳者

益益益益益
若若若若若
也也

「清適」はさんずいのくず
しかたと「青」の「月」の
部分に注目してください。

清
清
清
清
清
清
清
清
清
清

②
③

是乃其也
奉賀上候、陳者

以後、其事

枯雪路拂

多事の運び

難く思ふ

早

少放一

礼也

之

了

根

若尾氏

以執

益御清適之段

奉賀上候、陳者

「段」は文節のおわりにく
る語なので、文章の流れで
決まった位置にあり、また
くずし方も特徴があるため
覚えやすく判別しやすい字
といえます。

段段段段
段段段段
段段段段
段段段段

お慶

②
③

是の甚道之旨
を如くして、陳者

いふの美事と

枯雪路柿柿の

事心通しと云

難と云ふ花

月

少取一茶心

礼也月

之

下

根

若尾氏出候

以執中

益御清適之段

奉賀上候、陳者

「奉」は最初のお手紙で
紹介しました。

「賀」の「目」の部分は、
先ほども挙げた「月」など
と同じく、ボックスのなか
は省略されてしまいます。

「陳」も最初のお手紙で
紹介しました。「のぶれ
ば」の「ば」にあたる文字
は変体仮名の「者」で

「は」とよむくずし字です。

者者者者者者
者者者者者者
者者者者者者
者者者者者者
者者者者者者
者者者者者者
者者者者者者

お

是乃甚道之

④
⑤ 此度ハ美事之

枯露柿澤山ニ

此度ハ美事之

此度ハ美事之

此度ハ美事之

此度ハ美事之

此度ハ美事之

此度ハ美事之

此度ハ美事之

此度ハ美事之

此度ハ美事之

此度ハ美事之

此度ハ美事之

4～5行目は

此度ハ美事之

枯露柿澤山ニ

となります。

読み方は、

「このたびはみごとのころ
がきたくさんに」

となります。

「此」と「度」は最初の小
野書簡で紹介しました。

通常「見事」と表記する

「みごと」は「美事」と当
て字で書いていますが、こ
ういうケースは非常に多い
です。

「枯露柿澤山」も小野書簡
と同様ですね。

お

是より甚きこと無

き事と、陰

いふは美事と

6
7
8
古書拾遺抄

よき事と云ふは

難き事と云ふは

礼

少少放一茶心

礼也

と云

下

根

若尾氏出候

以執事

6～8行目は

御恵送被下誠二

難有厚く御礼

申上候

となります。

読み方は、

「ごけいそうくだされまこ

とにありがたく、あつくお

んれいもうしあげそうろ

う」

となります。

「恵」と「被」「下」は最

初の小野書簡でもご紹介し

ましたね。「被」はほとん

どカタカナの「ヒ」、

「下」は「:」のようにな

ります。

※「:」は左に90度回転した状態が正しい向きです。

お

是の甚道之

在る事と、陰

ははの事事と

6
7
8
古の道徳

の事と、

難と、

礼

少の故一

礼

之

了

根

若尾氏

以

御恵送被下誠二

難有厚く御礼

申上候

「誠」はごんべんが中国の簡体字のようになっていますが、つくりの「成」をご覧ください。前にご紹介した「成」のくずしがこのようなかたちでしたね。基本的になくずしを覚えると、応用が効いてきますので、いろいろ覚えていきましょう。

成成

成成

成成

お

是より甚き道に在

るを望むと、陰

に及び、美事と

6
7
8 古書体御礼

く書く道に在

るを望むと、

美事と

少許放一茶心

礼込

之

了

根

若尾氏出候

以執事

御恵送被下誠二

難有厚く御礼

申上候

「難有」は小野書簡でもでてきましたね。

「厚」はほぼ楷書ですが、「く」がひと曲がり多くみえるのは、「く」のもととなった変体仮名が「久」であることからですので、前にも指摘したように、かなはもとの字を意識して判読してください。

「御礼申上候」も小野書簡で出てまいりました。

お

是より甚き道に在

る如きと、陰

に及び、美事と

枯雪路拂作し

る事いとしき誠

難と、思ふ氣

9
10
11

不取敢一筆御

礼迄申上候

草々

下

根

若尾氏出候

以執事

9～11 行目は

不取敢一筆御

礼迄申上候

草々

となります。

読み方は、

「とりあえずいっぴつおん

れいまでもうしあげそうろ

う、そうそう」

となります。

「不取敢」は小野書簡でも

出てきましたね。

「一筆」の「筆」は、竹か

んむりではなく草かんむり

のようにくずす場合があります。

ます。

お

是の甚道之

在望と、陰

以後の事事

枯寂極怖

事の道と

難と、思ふ

9
10
11

少取一茶心

礼迄

之

了

根

若尾氏

以

不取敢一筆御

礼迄申上候

草々

筆筆筆筆筆筆
筆筆筆筆筆筆
筆筆筆筆筆筆
筆筆筆筆筆筆

「御礼」も小野書簡に出て

きました。が今回は簡略化さ

れた「礼」の字ですね。

「迄」は潰れすぎていてわ

かりませんが、文章上の位

置としんにようで判読しま

した。「申上候」もよいで

しょうか。

お

是より甚き道に在

るを望むと、陰

いふは美事と

枯雪路拂ゆし

る事いふは

難く思ふは

9
10
11

少以故一草心

礼迄申上

之

下

根

若尾氏出候

以執事

不取敢一筆御

礼迄申上候

草々

結語の「草々」は草かんむりとおどり字でほぼ判読できます。「草」の字は草かんむりと極めて省略化された「日」、くるりと2画続けて書いた「十」なので、ほぼ形が残っていますが、結語は「敬○」とか「拝○」とか「頓首」、「不」など使われる字が限られていますので、だいたい判読できる場合が多いです。

お

若尾民造様

ご挨拶と、

いよいよ新年

枯雪路柳

の香を

観る

は

おめでた

礼

12
13
14

下

根津嘉一郎

若尾民造様

御執事

12 ~ 14 行目は

一月五日 根津嘉一郎

若尾民造様

御執事御中

となります。

日付・署名・宛名のなかでは、「執事」の「執」がすこし厳しいほか、「嘉一郎」の「郎」は、「良」とおおざとのくずしかたをみることができるので、ここでもパーツを覚えていきましょう。

お

若尾民造

若尾民造

若尾民造

若尾民造

若尾民造

若尾民造

若尾民造

若尾民造

若尾民造

若尾民造

若尾民造

若尾民造

若尾民造

若尾民造

ということ、根津嘉一郎から若尾民造にあてた年始の贈物に関する書簡を読んでいたいただきました。

小野書簡も含めてみると、甲州財閥の家々は、季節ごとの贈答品を送りながらコミュニケーションをはかり、お年賀の定番は季節柄か枯露柿であることなども読み取れます。

また2点同じような時代（いずれも若尾逸平が亡くなった大正2年以降、民造や小野が在世中の大正10年前後あたりまでの間）のお年賀に関する書簡を比べることで、似た表現や同じ字の違うくずし字を見られるなど、古文書の学習としてのメリットもあります。

お疲れさまでした。(´Д`)ノ~~オツカレ

くずし字との格闘お疲れさまでした。

今回の「歴史のなかの年賀状」ではふたりの書簡資料をご紹介いたしました。きれいな筆跡の近世文書をたくさん読んで、文字のくずし方のパターンや様式などを学ぶことも大事ですが、近代以降のさまざまな人物が記した書簡をみると、書き手や書かれた時代の違いなどを深く体験できるので、近世文書とはまた違った楽しみ方ができるともいえます。時代が私たちの現代と近いことから、記されている話題や問題意識に親近感を持ちやすいという一面もあるでしょう。

年賀状に限らず、さまざまな近代の人々が記した書簡を収録した本もありますが、皆様のご先祖様の残したお手紙や記録も身近に眠っていたりしないでしょうか。もし近代の「古文書」に関心を持っていただけたなら、そのような二代、三代、四代前のご先祖が遺したごく身近な記録も、ぜひひもといてみていただきたいと思います。

おわりに

今回もマスク姿でお別れです。なかなかコロナ禍も好転しませんが、助け合ったり思いやりをもって乗り越えていきたいものですね。

次回のかいじあむ古文書講座についても、ひきつづき「おうちで」のかたちでお届けいたします。2月27日（土）ごろ、別の学芸員が登場しますのでお楽しみにしてください。

では、「おうちで古文書講座」におつきあいいただき、ありがとうございました。



顔面蒼白な講師近影

顔が青いのは雨乞いの仏像を照らすスポットライトが青いため。体調不良ではありません。皆様も体調管理にはお気をつけのうえ、来館時は体温の確認とマスクの着用、キープディスタンスをお願いいたします。

